

タイトル：2009 Middle Eastern and Islamic Studies in Japan: The State of the Art

日時：2009年11月12日（木）12:00～18:45

場所：Japan Center for Middle Eastern Studies, 2nd Floor, A2-1, Azariyeh Bldg, Beirut Central District (Downtown Beirut)

Against fatality: Kateb Yacine and Farjallah Haik

鶴戸 聡（東京大学大学院総合文化研究科）

まず最初に、今回で三年連続になる参加を許して下さった関係各位に謝意を表したい。これによって、レバノンの文学と演劇に対する持続的な調査や文献収集が可能になったばかりでなく、現地研究者とのコンタクトを持続的なものにすることができた。筆者にとってのレバノン研究の基盤は、この報告会での経験に多くを負っていると言えよう。

今回の報告では、アルジェリアのカテブ・ヤシンとレバノンのファルジャッター・ハイクという二人のアラブ作家をとりあげ、それぞれの主著とされる小説『ネジュマ』（1956年）と『カインの裏』（1955年）における「運命」の概念について比較検討をおこなった。この両名には直接的な交流はなかったが、ともにアルベール・カミュとかかわりを持ち、ほぼ同時期にパリでフランス語の作品を出版している。

カテブ・ヤシンは直接「運命」という語を用いることはなかったが、あたかも定められているかのように不運が連続する小説世界を描いており、その出来事の円環状の反復こそが運命を表象していることを、本報告では指摘した。くわえて、その反復、とりわけ「敗走」（*déroute*）というモチーフの反復こそが、運命によって定められた同一の結果が少しずつズレを生じて行くという螺旋運動の経験として構想されていることを、カテブのインタビューや彼が影響を受けたギリシア悲劇の例などに触れつつ主張した。この視点はこれまでの先行研究には見られないものであり、コメンテーターのカティア・ハッダード教授（サン・ジョゼフ大学）からは **innovative** であると肯定的な評価を頂戴した。

一方、ファルジャッター・ハイクは小説の冒頭より「運命論者」を標榜しており、しかもその運命に必ず敗れることを知りつつ反抗を唱える点で、極めてカテブに近似する。また、その運命論が独自の「オリエント」論と結びついていることを指摘しつつ、フランス語使用の問題がオリエントの再領有化を賭した闘争でもあることにも言及した。ただ、時間の都合もあって両者の詳細な比較検討には立ち入ることができず、より具体的・精密な状況比較を行うようにとのコメントを頂戴した。報告を終えた後も、レバノンにおけるハイク研究の状況や、アレキサンドリアへの亡命を通じたレバノン文学におけるギリシア性の影響の問題などに関して、ハッダード教授にはさまざま貴重なご教示を賜った。また、エジプトから招聘されたイーマーン・ファラグ教授も交えて、エジプトのフランス語作家アルベール・コセリーを始めとするマシュレクのフランス語文学の伝統について幅広い議論を展開することができた。

なお、報告会の後に表敬訪問したフランス大使館付設の近東研究所は、フランスの行政がどの

ようなスタンスでこの地域を対象とした学術活動に参加しているのかを垣間見ることができ、大変興味深いものだった。